

## 子どもたちのこと

### 七、チビちゃん

#### 大橋利恵子

今年入園した子の中に身長九一・九cm、体重十三・二kgの子がいる。四歳三か月の女の子にしては大変小柄であることはまちがいない。アトピー性皮膚炎に悩まされ、まだ顔やおなかなどにも赤い湿疹がポツポツとみえる。からだが小さいことと、発達程度や精神年齢が幼いことは、因果関係はないのかもしれないけれど、小柄なK子は全体的に幼なく、思わず「チビちゃん」と言ってしまう。また、登園するとすぐに、私の足めがけて突進し

てくる。(私は背が高く足も長い? ので、どうしても足にしがみつくことになる。)抱きついている上から「おはよう」と言うと、「いやんもん」「制服脱いできたら?」と促すとまた「いやんもん」しかたなく、よいしょと持ち上げてロッカーの前につれていく。それがうれしくてまたしがみつく。軽いのでつい私の方も持ち上げやすく、他の子だってやってほしいのだからなと気づかないながらも、K子を抱くことが多くなってしまふ。あまり多くてもいけないなと思ひ、三回目には「さ

あ、がんばって」とK子をそこに置き、他の場に行くことにしている。

K子の「いやんもん」はまるで「はい」というあいさつがわりで、何を言っても「いやんもん」「できん」（共に岐阜の言葉でいや、できないということ）とかえってくる。よく何でも親にやってもらっている男の子も「できない」を連発するが、そうした場合、こちらもしうにこにことはしていられず「これからは何でも自分でやろうね」などといった説教をしてしまう。でも、K子の場合にはやればまあまあふつうにできるのに、ちゃんと甘えて「できない」と言うので、ついついこちらも「困ったわね」と手を出したり、「がんばらなくちゃ」とはげましたりという対応になる。よく考えてみればチビちゃんの作戦勝ちであり、明るい性格と小柄なことをフルに活用して甘えんぼをしているK子である。

K子は現在、施設から通園している。その施設

は親のいない、もしくは親が何らかの事情で子どもを育てられない場合の赤ちゃんから中学生までをあずかっている。K子は赤ちゃんの時から施設で育ち、親の味を知らない。くったくなく誰にでも甘えていける性格は、その施設の生活で培われたし、また、施設の生活には大変有効な性格かもしれない。

最初にK子が全体に幼ないと書いたが、言葉の発達もまた充分でなく、サ行もカ行もタ行になっってしまう。だから「てんてい」だし口ぐせの「ばか」も「ばた」である。先日、園外保育に行った時に、大変おもしろいことがあった。その日、K子はA男と手をつなぎ先頭を歩いていった。よつ角を渡る時に当園では車の有無を確認する為「右よし、左よし、右よし、さっさと渡りましょう」と大きな声で言っている。K子はいつものように「右よし、左よし、右よし、右よし、たつたと渡りまっちゃう」と元気に言っている。となりのA男も負けず

に「右よち、左よち、右よち、ちやっちやと渡りまちょう」と言う。それを聞いていた子は「たつた、だもん」とA男に、するとA男は「ちやうよ、ちやっちやとだよ」K子「たつた！」A男「ちやっちや！」とやりあっている。自分の発音はなおせなくても耳はきちんと判断できているので、他の子のまちがいは気づけるようである。二人ががんばって言いあっている間に私が割りこみ「そう、さっさだね」と言うと二人して「うん！」笑いをこらえるのに必死であった。

そんなK子が五月もおしまいになるころにいつものようにだっこされにきたので「またチビちゃんですか？」と聞くと「チビじゃないもん」とはつきり拒絶した。ああ、K子のプライドが芽を出してきたなど大変うれしく思い、その日以来、チビちゃんではなくなったK子さんである。

(岐阜北幼稚園)

